

日本語における表現と意識

氏 家 洋 子

1. 「表わす表現」と「現われる表現」
2. 意識と言語
3. 「単語」のもつ問題点

1. 「表わす表現」と「現われる表現」

5時頃迄に届けて下さい。

という日本語を英訳しようという時、日本人の中で生活し、日本語に精通している英人が、

「頃」は無視して英訳した方がよい。日本人はふつう「頃」というのである。

と言ったり。即ち、

Please $\left\{ \begin{array}{l} \text{bring} \\ \text{deliver} \end{array} \right\}$ it by 5 o'clock.

であり、about は不必要だというのである。

日本語をよく知っている外国人だからこそその発言であろうが、

5時迄に届けて下さい。

と

5時頃迄に届けて下さい。

を、我々日本人はどう使っているのだろうか。

たしかに、「迄に」というより「頃迄に」ということの方が多いと思われる。しかし、5時過ぎでは都合が悪いという場合には「迄に」とはっきり言うのではないか。あるいは「必ず」などという語を併せて使うかもし

1) J.E. Feagan 氏。73年度早大語研日本語研修「翻訳」クラスにて。

れない。

そして、ということは、両者の違いを実ははっきり意識しているということであり、だからこそ、「迄に」の直接性を避けて「頃迄に」という婉曲表現を使っていると言える。

このことは、常に日本語があいまいだとされていることを、「表現」をどうとらえるかという地点から見た時、興味深い問題を提出していると言える。

日本語は表現があいまいだ。

という言い方は、実は極めてあいまいな言い方である。

それは「表現」という語に一つの原因があると言える。「日本語」と言った時、それは「日本人の表現」とイコールとも言える。が、一方で、言わばテクニックとしての「表現」というものも考えられる。前者は、言おうとすること(心にあること)が表に現われるということで、

現われる表現

後者は、逆に、さまざまの表わし方の中から選び取ってするという

表わす表現

として区別してみよう。

私が「5 時頃迄に」で述べたことは、日本語の「表わす表現」が婉曲的だということになる。なぜなら、日本人はここで二つの表わし方を持ち、その違いを知っているからこそ、ふつう、「頃迄に」を選び取っていると見るべきであろうから。

このことは、同時にいくつかのことを語っていると言える。

よく言われる、日本語にあいまい表現が多いということと日本人の考え方の特性とを結びつける行き方に対し、それを「現われる(現われた)表現」と取るなら、確かに、考え方があいまいだから、それが、使う言語にも現われるということが可能である。だが、先に見たように「表わす表現」「選び取りの表現」と見るなら、それは自から、考え方の直接反映ということにはならない。

「表現」という一語に、これらをゴッチャに込めて使っている、従って、

区別して考えていないという実状がありはしないか。

また、或る韓国(国名は大方の国の人自身の呼称にここでは従う)人学生から次のような意見が出た。

日本人(学生)は一緒にお茶を飲もうと誘おうとする時、まず「お暇ですか」と言い、「はい」と答えると、「じゃ、お茶でも……」と言う。なぜ、はじめから、「お茶を飲みませんか」と誘わないのか。

というのである。勿論、日本人がいつもこのような誘い方をするわけではないが、ここには或る種の人間(日本人?)の特性が現われていると思われる。

親しくして、相手と気心が通じ合っている関係ならいざ知らず、それほど仲でない場合、第一に、はじめから本意(お茶を飲もうと誘う)を言ってしまって、断われたら具合が悪い。しかし、ワン・クッション置いて、暇かと聞き、暇でないと言われれば、「大変ですね」位のことを言って、自分の意思——明らかに告げていけば結果として断われたであろうそれ——を言わずに済んだということになる。

そのような経験、及び、その経験に対して持った気持という積重ねで、ふつうワン・クッション置いた言い方をするようになる。

また、第2に、逆に自分が誘われる側である場合、直接、お茶を飲もうとか、少し話そうと言われたら、その時実は忙しいとか、あるいは話したくないとかで断わりたいと思ってもちょっと断わりにくくなる。そういうことがあって、誘われる側の時もワンクッション置いた誘いの方が有難いと感じる。

こうしたことから、「暇ですか」に始まる誘いの形を使うことになる。

ふだんそれほど意識していなかったことであるが、その学生の指摘を受けて、10数人の各国学生と話し合いながら出した結論は以上ようになった。この、私の感じ方に全く一致した人はその中に1人いたが、その人は父親が日系2世、母親が日本人というアメリカ国籍・育ちの女性だった。

一番、学生がわかりにくいと言ったのは、断わりにくいということについてであった。自分が忙しければ断わるのは当然だという意見が強かつ

た。主にそれは韓国、台湾の男子学生から出ている。

断わったら相手が気を悪くするのではないかという懸念、つまり、人の気をそこねたくないという気持、それがわからないという。それは、自分の都合が悪い時ははっきり断わるから、相手が断わっても都合が悪いなら当然だと考えるはずで、ここにおいては確かに成り立たないことであろう。

同じクラスの欧米系の女性は、「もし暇なら飲みませんか」と誘うと言う。これは、先述した直接誘うのと間接の場合との中間に属すと言えるが、断われた場合を気使う恐れの有無という点では、間接的誘い方とは一線を画している。

日本人が全て上述したような感受性を持ち、外国人がそれと違うというようなことは勿論ないが、少なくとも日本人が直接表現を避けるとか婉曲表現を選ぶとかという場合は、上のような感受性とか意識に基づいてのことと見ることができる。

しかし、だからと言って、それをへんに拡大したり、逆も成立つなどとしてはならないはずだ。

表現と考え方、ことばと感じ方といった問題について考える時、その表現・ことばというものをどういうレベルで考えるのかによって、感じ方・考え方に関して言える奥行きも大体決まってくる。

大まかに言えば、語→文→文章の順で、その奥行き・深さは大となるが、語と一口に言っても、文相当のレベルのものがあることにも注意を払う必要がある。文相当とは、ある判断・認識を表わしているということであり、それに相当しない、単に文の一部をなす単語を、感じ方・考え方との関係において同一に扱い、考えることはできない。

少なくとも、かなり広い意味での共時ということを考えて、それにおいて、つまり、共時的に、そう言わざるを得ない。

今挙げた誘い方の例などは言語・表現形態として、かなりまとまった思考部分を示している。単に、習慣としての言い方だとして、共時論からそ

の言い方の問題を切離すことはできない。

そして、はじめに表現について「表わす」と「現われる」とを問題にしたが、もしこの術語を使うなら、更に意味を深めて、思考という高次のレベルを表わすものについて「表わす」とし、それ以前のいわゆる単語レベルのものについて「現われる」と区別することができる。むしろ、このような方向づけの中で両者を分けて使う方が、表現主体の意図の有無で分けることに伴う困難から救われそうである。意図と言ったが、もう少し幅を広げて意思とすれば、それによって作られる主体的表現を動的思考としての「考える」を表わしたのと同じくしてみたいというわけである。この「考える」には思考過程の始まる所に確と位置する「感じる」をも含むプロセスの全体を代表させたいと考えている。

荒木博之氏「日本人の行動様式¹⁾」は板坂元氏「日本人の論理構造²⁾」と一部、同じ語彙をとりあげ、その点に関しては論旨も大筋のところ一致しているものだが、ここでは次のような問題を取上げてみたい。

このたび転勤することになりました……

の方が、

このたび転勤しますので

という言い方より「喜ばれるのは」

つまり日本人の行動が自然発生志向的、「なる」の論理志向的であるからにほかならない。

としている。この『「なる」の論理志向的』とは

自己が放棄され、否定されてしまっている

ということであり、

転勤する主体はあくまで自己であるにもかかわらず、自我は小さく抑圧されて、転勤するという行為を木に果実がなるごとく自然発生的にとらえようとする態度である。

とある。これを

1) 荒木博之『日本人の行動様式』講談社 73. 5.

2) 板坂元『日本人の論理構造』講談社 71. 8.

先生があす羽田をお立ちになる
先生があす羽田をたたれる

などと一緒にして

日本人の行動の規範としてある集団論理性
また、

日本人の行動の属性としてある他律性
が言語に色濃く投影した例としている。

言語学がいくつかの理由から脚光を浴びている今日、他の学問分野からそこにおける言語との関連が言われることも多くなった。言語というものの自体、人間の学の基本において顧みられねばならないものだから、その傾向自体は理由の如何にかかわらず歓迎したいところである。

しかし、安易な関係づけがそこでなされたら、それはどのような形からであるにせよ、言語について考えていこうとする者からの発言が必要になる。そうした意味において、ここでいくつかのことを言わねばならないだろう。

「なる」とか「(ら)れる」とかはまず第一に単語ないしはそれを構成する部分というレベルに属する。それは現共時態以前の共時態においては或る思考のまとまりを反映したものであったかもしれない。しかし、それを現共時態において論ずる時、同一に論じてよいものであろうか。

たしかに、「単語」と分類されているものの中にも、実は或る、かなりの思考のまとまりを表わしているものがあると現共時論的にも言えるものがある。だが、それは文論的視点から照射するとはっきり浮かび上がってくるのだが、現象的には単語の形を取りながら、実は叙述と深く係わり合ったものの一群である。それについては3章で少し触れることになると思うが、ここで問題にしている「なる」「(ら)れる」等を、そうした、単語の中でも特殊なもの、として扱うことはできない。

そして、これらは、我々が自分の意思・感情等を表わす時に「現われる表現」に区分されるものと言わねばならない。それは現共時態において、表現しようとする時これを言語上の材として使わなければほとんどどうに

もならないものである。

彼は大人になった。
さいふを盗まれた。

などにおける「なる」「(ら)れる」を使わずに同一のことを表現することはほとんど無理なのではないだろうか。

また、そうではなくて、

- a 転勤するので
- b 転勤することになったので

の違いについて考えているのだと言うことかもしれないが、この違いについて考えることが問題を一段せり上げることになるとは思えない。a が意志的言い方で b がそうでないという違いは確かにあるが、それは a と b とを直接ひきくらべてのことであり、b の言い方をしたから表現主体の心の態度に意志性がないというもっていき方は当を得ていないのではないだろうか。「転勤する」ということに決まった、そのような事態になったという面とかあり方とかが注目されれば b の言い方がとられるのではないか。全く同じ様相(その事態への視点を含めて)を表わすことができ、その上に意志性の有無という違いで二つの言い方があるという場合なら、荒木氏の結論に養成したいが、a と b とでは表現主体の注目の仕方・方向が異なっていると見るができるわけである。

性急な断定は避けたいが、現共時態以前の或る共時態においてなら、荒木氏の指摘するようなことがあるいは言えるかもしれない。しかし、それを現共時態においても同様に扱おうとするなら、それは「現われる表現」として我々の前にあり、選び取る余地が今の我々にはないのだというべきではないか。2章末で触れる、ことばの世界の論理の範疇に入る問題である。

「自然発生的にとらえようとする態度」という言い方には、極めて意図的な、言わば「表わす表現」としての選び取りがそこにあるという見方が窺える。かつては確かに選び取りがあったかもしれない。と言うことは、現共時態に於てもやはり密接な係わりのあることではあるのだ。だが、と

同時に、そこに時間の流れがあるということはことばがその使用の歴史にたえてきたということでもある。そのようにして在る「今」に於いて、そのことばの使用の始源時と同様に「表わす表現」と見ることは当を得ない。

以上の見方は、その前に記した、視点が違う、単語として在るという見方から大幅に譲歩して、成り立つと思われることを考えたことである。

荒木氏の日本人の行動に関する結論自体に異議を唱えるものでは全くないが、それをことばと結びつけて進めた所に疑問を感じたわけである。ことばの論理と事実の論理はそのように簡単に結びつけられるものではないと私の立場からは言わざるを得ない。

2. 意識と言語

いつの頃から、その声が大きくなってきたのであろうか。「私達はことばでものを考えている」——と。

おかしいことに、ことばについても、「考える」ということについても、何の規定もせずに話し合っただけでさえ、もし、上に挙げたような言い方に反することを言ったら、それはゴージャスたる非難を浴びることになる。そんなムードが私達の間にはある。

その言い方は、しかし、いつの場合にも唯一絶対の結論なのであろうか。もし、違うとしたら、どのように違うのか。私は私の立場からその周辺に存する問題について考える所を展開してみたい。その辺が明らかにされることなくして、無規定的に、上の言い方に反すると決裁されるというのは、まさに考え方の絶対主義とでも言うべきものであるから。

まず、言語とか思考とかというものを定義する前に、ごく大まかに、一般的な両者の関係といったようなものから考えてみよう。我々が他の人の考えている内容を知るのは、或る場合にはその人のことばを通してであり、また、或る場合にはその人の態度・行動等によってである。このように、ことばとは一つに、明らかに或る表現の形態という面を持っているということができよう。

心余りてことばならずという文句もあるように、ことばとは、しかし、その表現においても、表現しようとする内容、そして、その内容を意識する心との関係において、常にその機能を十分に発揮できるとは限らない。

この言い方の中に、既に私はこの稿で述べようとする言語について、その規定をしていることになる。

それは、言語を「考える」こととの関連においてとらえようとする立場である。「考える」としたのは、「思考」という語が「思考された結果として存るもの」をも含む、と言うよりは、主にそれを指している、つまり、形として静態的であるのに対し、生成的な、過程そのものにその本質を見るところから、特に区別して選んだわけである¹⁾。これをもう少し詳しく言えば、感覚・知覚に始まり、次々に考え、考えを進めていく過程ということになるだろう。

そして、その時、そこでことばがどう関わっているかが当面の私のテーマである。

ところで、先に私は「表現しようとする内容、そして、それを意識する心との関係において」ことばは表現の機能を十分に発揮できるとは限らないと言った。「考える」を生成的にとらえる時、その下限には感覚・知覚が入るであろうが、それよりもっと「考える」そのものに近い所にあるのが、「意識」である。

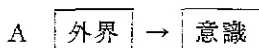
人間はことばでものを考えているという言い方を支えていると思われるものの一つに、例えば、日本人は日本語でものを考えているという言い方がある。この表現はいろいろなレベルで使われ得るものと思われるが、この言い方を成立させるものの一つに、実は考え方そのものより、広く文化的基盤——風習・宗教・伝統等の違いが混同されているのではないかという恐れを一つに私は持つのである。それは「考える」というダイナミックな作用において、まるで切り離してはいけないものだが、知覚・意識等のレベルまでで関わっているという制約をさらに見落してはならないであろう。

1) 拙稿『『考える』とそこにおける言語』『早大語研十周年記念論集』73. 3.

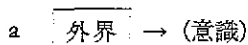
そこで、大局的には以上述べたような観点に立って、ここで意識と言語との関係について考えてみたいと思う。

意識と言うからには、何物かがあって、それについての意識ということになる。この何物かをまず、広義に「外界」としてみよう。言語でも意識でもなく、人間のまわりにおいて、人間に影響し、また、人間と係わり合うものである。

外界・意識・言語という三者をたてて考えてみると、まず、外界に或る物が存在し、それ故、意識にそれが映る、意識されるというものを

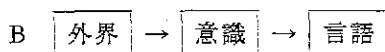


としてみよう。同様に、外界に或る物が存在するが、それが意識に上っていないという場合については、

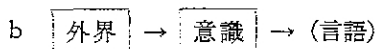


とし、「意識」に括弧をつけて図示する。

同様に

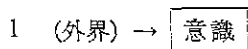


そして、



ということが考えられる。

「外界」なる語は広義的な使い方であり、例えば、或る心情のようなものも、意識に映るものとして、外界としているわけである。従って、



という組合せは考えられない。

そして、この矢印は時間性を含むから、l が考えられない以上、



も考えられないということになる。

そこで、A は必ず B か b となり、b の場合、及び a の場合は言語表現

の現出を見ないということになる。

抽象論をもてあそばすという意図によるのではなく、例えば、世界のさまざまな社会で、いずれも生物学的ヒトが社会的人間になるような過程を経ながら今日の社会ができてきているわけだから、人間の中に支配・被支配等による序列が各社会にできあがっているということがある。恐らく現在の地球上のどの大分された社会にも或る種の序列が多かれ少なかれあるとあってよいだろう。そこで、それは、まず

外界 →

となる。これがAである場合もあり、aである社会もあるだろう。Aであるなら、Bかbかのいずれかになる。

勿論、矢印の関係が逆方向を向く場合も考えられるのだが、その場合は、例えば

X 意識 ← 言語

ということは、言語がいわゆる言語表現ということではなく、意識との関係において「外界」となっているとみてよいだろう。

また、

Y 外界 ← 意識

というような場合については、意識が外界をよく見させるということであり、しばしばあることだが、以上二つの場合のいずれにしても、逆向きの矢印の関係は二次的なものと見ざるを得ない。そうした位置づけ・制約をここで確認しておくことにする。

そうすると、ここで話を先程の所へ続けて、例えば日本語にいわゆる敬語が発達していることをどう解釈するかという場合、日本人が(広義の)序列意識が強い(必然性あってのことだがともかく静態的な言い方をすればこうなるだろう)からというのは一応当たっていると言えるのだが、これを逆に「序列意識が強いと敬語が発達する」とすると、Bの形のみを頭におき、bのようなあり方の存在を否定するということになってしまう。

中国・インドどの社会でも序列意識が強いとは中根千枝氏も説く所である¹⁾。しかし、ここで、日本・朝鮮・チベットなどの各言語における場合と違って敬語の発達が見られないということは、B・bに於て、特に、

意識 → 言語

のみの考え方では片手落ちで、

意識 → (言語)

のようなあり方も考えねばならないということだ。

このことはとりも直さず、意識と言語とを同一視する誤りを指摘していることになる。それは、言語には言語の世界・論理があるということではないだろうか。それは、外界の、つまり、事実の世界・論理とは別にあるということであり、この辺が混同されている、また、そのことのためにいろいろの不都合が生じている、ということではないだろうか。

ところで、上述したような見方の位置をよりはっきりさせるために、次のような見解を挙げてみよう。それは

存在 → 意識 → 言語

が主要な規定関係として図示され、

言語 → 意識 → 存在

が副次的な規定関係とされている見方²⁾であるが、これを上述のものとは比べてみると、「存在」と「外界」という名称の違いはともかく、意識が言語を規定し、存在が意識を規定するというように各部分をおさえ、最後に、三者の規定関係をストレートに結びつけている。ここにあっては甲が乙を規定する場合としない場合というような考え方はされておらず、甲は乙を規定するという論じ方である。

副次的規定関係の内の「言語 → 意識」の部分に関しては「人間は自己の言語をとおしてものをみる」と言われている所に現われていると言う。この「みる」が「考える」の出発点として位置づけられるものなのかは定

1) 中根千枝「タテ社会の人間関係」講談社 67.2.

2) 湯川恭敏「『主語』に関する考察」『言語研究』51, 67.3.

かでない。

3. 「単語」のもつ問題点

2章の終りの方で、言語と、外界・事実の世界または論理は別のものだと書いた。しかし、それをただ別物だとして全く切り離して考えようというのではなく、関連づけがそこに可能ならそれほどのような形においてなのかが明らかにされねばならないと思う。

ことばの側から思考の実態を探ろうとする時、おのずから在る制約というものにも思いを致してもらいたい。或ることばの群から、そのことばを使う社会に、その語で表現される心情とか思考とかが存するということは言えるが、それを逆に、そうした語がなければ、その語によって表現される内容となる、心情とか思考とかが存しないという言い方をしたら誤謬に陥ることになるだろう。

2章に挙げた敬語の例は必ずしも序列意識と結びつけなくてもよいということが現在の的には言えるかもしれない。が、色彩の表現にしても日本人が緑をアオと言ってきたからと言って、青と識別ができなかったということではない。言語的な表わし方が違うということである。そして、或る言語にはその言語の体系ができているのだから、その一部分を引っぱってきて他の一部分と比べるというやり方は本来避けるべきものである。そのような地点で言われることは部分同士の比べ合いながら、必ず一方を下敷にして、その基準に合うか否かで物を言っている。

こうした問題について、より言語学的レベルでは次のようなことが言えるのではないか。それは先に「考える」についてその本質を過程的などころに見るからこそこの語を使ったとしたことに関係するのだが、これを文法の単位とされている、単語・文・文章というものと関連させてみると、より深まる「考える」に対応するものは、単語・文を越えて文章のレベルに向かう所なのではないかということである。

2章における B・b の違い、言語の形として現出するか否かの違いとして示したものが一体どこでそう判定されるかは、主に単語のレベルによっ

ている。と言うのは「言語」が主にラング的意味において現状では一般的に取り扱われているからということでもあり、また、そのこととも関連するが、我々の観察の対象として、単語というものは実に手っ取り早い、言わば、物理的でさえあるということがあるからだ。そして、文、更には、文章というレベルにあってはなおさらのこと、スタイル(文体)という問題のされ方はあるが、この言語社会にはこうした文章があるということが内面的なものを含みこんで言われるほどの抽象化は進められていないだろう。フォルマリズムなどにおいて試みられてはいるが¹⁾。

言語学的にその辺にアプローチするためには接続詞・指示代名詞等を手がかりにすることが考えられるが、この稿では、まだそこへ行く前に横たわっているいくつかの問題を片付けることを試みよう。

2章における図示は、「意識」が「考える」に於て一定の価値づけしかもたないことと相俟って、生成的な「考える」に於ては瞬間的な静態化の意味しかないということを言っておかねばならない。そして、「考える」の過程性・力動性に見合うものとして、単語の上に文・文章というレベルがあると一応は考えられる。

例えば、日本語社会にしかないと言われるような表現も、他の言語社会へもって行って説明することができないわけではない。日本語では一語に凝縮して表現され、また、それに使って人が自分の言わんとすることに利用しているということであっても、他の言語社会では多くの語を用い、文にして、時に文章に直して、その国の語で説明することが可能なわけである。そして、人はそのことによって必ず内容を理解する。説明によってもワカラナイという場合があるとすると、それは風習等による、その内容の前提となるものに対する解釈に原因がある。

このことは英語社会で日本語を長年教えている板板元氏の述べる所²⁾とも一致しているし、また、大出晃氏が「日本語と論理³⁾」で説く所にも通

1) V. シクロフスキー『散文の理論』(水野忠夫訳)せりか書房 71.6.

2) p. 71 注2に同じ。

3) 大出晃『日本語と論理』講談社 65.4.

じる。

それでは、ある語が一つの単語の形をとっているということの意味は何か。先に私はその説明に凝縮という語を使った。だが、例えば物を書く為の台に「机」という名がつけられているというような場合、つまり、外界界に物理的に存在するものについての名称のような場合と、或る認識とか心情の表現、

○さすがが文学者ですね。表現の仕方が違う。

○どうしてもこの暑さはやりきれません。

のような場合とでは大分趣を具にする。凝縮という言い方は後者のような場合に適當であろう。

「考える」(この稿では広義で使っているのであるが)という方からことばについて考えていくと、単語とされるものの中に、こうした、言ってみれば文に当たる認識・心情等が籠められていることに気付いて、これらを特立させる必要を感じたのである。

しかし、「単語」とされているものの内実を見て、それを分類しようという目的ではない。あくまでも「考える」について考察し、その「考える」の方からことばを見ていこうというのであり、その一環として、単語とされているものの中にも文相当のレベルのものがあり、その特質は或る過程を含んでいるということにあるのではないかと見る。

73. 7. 21

〈後書き〉 73年度公開講座では、この稿に後続するものとして「含過程構造」の一部について話した。この概念は生成中であったため、更に発展させて別の稿に併せてまとめることにし、本稿は標題に直接該当するもののみでまとめた。